

研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 3 7	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Case ascertainment of alcohol dependence in general population surveys: 'gated' versus 'ungated' approaches. 一般集団調査におけるアルコール依存症の症例確認	
執筆者	
Degenhardt L, Bohnert KM, Anthony JC.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Int J Methods Psychiatr Res. 2007;16(3):111-23.	
キーワード	
疫学研究、精神化領域の診断面接、アルコール、乱用、依存	
要 旨	
<p>目的：</p> <p>社会的役割の障害やその他の適応不全は薬物乱用症例の定義として DSM-IV-TR に明言されている。しかしながらこれらの”臨床的に有意な”障害や適応不全を診断基準および評価のプロトコルに組み込むべきなのか、もしそうならどのように組み込むべきかに関しては長らく論争的となっている。薬物依存を対象に含む最近の精神科領域の大規模調査に“gated”アプローチによる診断を適用した場合に、“ungated”アプローチによる診断の場合と比較して、結果として次のようなことが起こるとおもわれる。(a)より少ない症例しか取り上げられない、(b)薬物依存の発症との関連にバイアスをもたらす。なぜなら“gated” アプローチでは社会的役割の障害やその他の適応不全の存在を前提条件(“gate”)として薬物乱用を診断しているからである。</p> <p>方法：</p> <p>アルコール依存に焦点をおいた本報告で、われわれはこの問題を探ってみた。アルコールとその関連状態に関する米国疫学調査(NESARC:US National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions)の断面研究データを用いた。本調査は 44,093 人の成人を対象にした世帯調査である。NESARC 調査で用いられたアルコール依存の定義は“ungated”な考えによるがデータ自体は“gated”アプローチによる診断基準を用いたシュミレーションを行うことが出来る。</p> <p>結果：</p> <p>“ungated”アプローチによる診断基準を用いた場合に比べて、“gated”アプローチによる診断基準を用いた場合、アルコール依存症の推測有病率が明らかに低下した。しかしながら、背景特性とアルコール依存症有病率とをつなぐ関連のパターンは“gated”“ungated”のどちらのアプローチを比較しても明らかな違いは認められなかった。</p> <p>結論：</p> <p>アルコール使用とアルコール依存に関する詳細な調査を行う際に“ungated” アプローチを用いるのはそれなりの理由がある。</p>	